

夜の診察室、担当医と二人きり

体験版

最近、体調がおかしかった。

大きな病気というほどではない。

でも、どこか落ち着かない。

朝起きたとき、少しだけめまいがする。

胸の奥が、ふわりと揺れるような感覚。

「……疲れてるのかな」

そう思いながらも、

違和感は消えなかった。

「奈緒、大丈夫？」

後ろから声をかけてきたのは、夫の翔太だった。

「うん、大丈夫」

私はすぐに笑ってみせる。

優しくて、穏やかな人。

結婚して二年。

変わらない日常。

だからこそ、心配はかけたくなかった。

でも。

胸の奥のざわつきだけは、

どうしても消えなかった。

その日の夜。

私は、駅前のクリニックに来ていた。

19時30分。

夫はまだ工作中。

「これなら、大丈夫かな……」

小さくつぶやきながら、

ドアを開ける。

静かな空間。

白い壁。

消毒液の匂い。

「奈緒さん、どうぞ」

診察室に入ると、

白衣の男性がこちらを見ていた。

「高坂です」

落ち着いた声。

穏やかな目。

「今日はどうされましたか？」

安心するはずなのに、

なぜか胸の奥がざわつく。

「少し、めまいがして……」

説明すると、先生はうなずいた。

「念のため、診てみましょう」

その言葉に、

私は少しだけ安心した。

「横になってください」

診察台に横になる。

ライトが少し眩しい。

「楽にしてくださいね」

先生が近づく気配。

白衣の擦れる音。

「少し触診します」

そっと触れられる。

医療行為。

そう分かっているのに

体が、少しだけ緊張する。

「力、入っていますね」

見透かされたような一言。

「すみません……」

「大丈夫ですよ」

優しい声。

それなのに、

なぜか落ち着かない。

「もう少し詳しく診てみましょう」

先生はそう言って、

カーテンを指した。

「こちらへ」

私は小さくうなずく。

カーテンの向こうに入る。

シャツ

カーテンが閉まる。

外の視線が、完全に遮られる。

その瞬間。

空気が、変わった気がした。

ここには

私と先生しかいない。

「緊張していますか？」

すぐ近くで聞こえる声。

「少しだけ……」

「大丈夫ですよ」

その声は優しい。

それなのに。

胸の奥のざわつきは、

消えなかった。

静かな診察室。

カーテンの向こう。

私と先生、二人きり。

このとき私は、まだ知らなかった。

この診察が、
ただの検査では終わらないことを。